

しおり
滝ノ入こみちの榊

少年の夕方

須藤 澄夫





滝ノ入こみちの葉^{しおり}
少年の夕方
須藤 澄夫

まつやま書房

須藤 澄夫（すどう すみお）

1948年生まれ。

1973年、『経営問題』（中央公論社）の懸賞論文「現代上役論」に入選。

この頃、「企業の社会的責任論」など、各種論文が入選。

1982年から、地域文化を考えると、高麗川作文教室を主宰、雑誌『手習帖』を年一回発行。現在9号。

1986年からは、気分で刊行するの意で、個人通信『気刊・滝ノ入通信』を発行、現在66号。

著書に、時代小説『幕末残照』（新人物往来社）や、絵本エッセイ『水尾はねえ』（高麗川作文教室）がある。『幕末残照』は、権力に和せず志に殉じた米沢藩士雲井龍雄と、キリシタンだったために大島へ流されながらも果敢に生きた女性おた阿・ジュリアを描いた2編をおさめる。『水尾はねえ』は、わが子の日常を通して平凡な平和の大切さを説く。

そのほか、ベンジャミン・フランクリンに関する翻訳もあり、読書や地域文化についての文章も記している。

住所 埼玉県入間郡毛呂山町滝ノ入 462-6

少年の夕方 — 滝ノ入こみちの葉 —

1991年6月10日 初版第一刷発行

著 者 須藤 澄夫

発 行 者 山本 正史

さし絵・カバー絵 小島 喜八郎

制 作 (株)比企文化社 自由編集室

印 刷 第一印刷株式会社

印 刷 者 杉山 弘行

発 行 所 まつやま 書房

〒355 埼玉県東松山市松葉町3-2-5

TEL 0493-22-4162 振替 東京9-70394

©SUMIO SUDO ISBN4-944003-45-5 C0092

定価はカバー、表紙に印刷してあります。

無断でこの本の内容を転載・コピー・写真絵画その他これに準ずるものに利用することは著作権法に違反しますのでできません。乱丁落丁本はおとりかえいたします。

亡母阿づ満に捧ぐ

滝ノ入こみちの葉

少年の夕方

目

次

須藤さんに

吉野
弘

10

第1葉 走った走った

13

走った走った

14

三十路の臍物

18

少年の夕方

22

水子地藏

26

みち

38

虹色のリレーバトン

40

割箸

46

顔

51

あの人

52

第2葉 春が好き

春が好き

人形

故郷を愛するということ

涼人

祝い歌

71 72 74 76 78 80

あいうえお

働こう働こう

仇討ち

子供の熱と父の胃

一人っ子

病院の待合室

54 56 60 62 67 68

返事

82

第3葉 天桃の困窮

犬たち

87

やかん

88

死観

90

春の小川

91

天桃の困窮

92

菜の花

96

意義

98

人生

100

このごろの雨

101

休日

102

光の汗

104

「も」

108

いのちよ

五十音る付

彼岸此岸

あると感じるとき

わが愛するもの

120 116 114 112 110

第4葉 夏・滝ノ入道案内

123

夏・滝ノ入道案内

124

詩人点描 劉 光石

134

あとがき

137

カバー絵・さし絵 小島喜八郎

須藤さんに

吉野 弘

御詩集『少年の夕方』の独自の作品の数々を楽しく拝誦いたしました。

雲井龍雄との架空対話型式で書かれた長篇小説『幕末残照』を以前拝誦したとき、確かな筆力に感じ入りましたが、今度の御詩集でも、一層自在になった筆致を感じます。

「仇討ち」というお作の中の〈他人勝手〉という言葉に笑わされてしまいました。〈女房は私より一時間半も前に起き／二時間も後に寝る。／自分勝手に一時間半も前に起き／暇潰しに二時間も後に寝るのではない。／そうしなければ家庭がまわっていかないからで〉という数行に続いて〈いわば他人勝手だ。〉が現れるのですが、この〈他人勝手〉という言葉を思いつくのが奥さんではなく、家長たる〈私〉が思いつくところに、〈私〉の人柄が感じられて、楽しいのです。さてしかし、作品中の〈私〉は、この言葉で奥さんの苦勞をねぎらう一方で、ふと考えます。〈我慢強い女房殿〉は〈私が年寄りになるのを見計らって／イチ抜ケタァ／と言うのではないか〉と。このあたりは、辛抱強い女性を妻としていながら我が倅を重ねている世の腕白亭主どものひそかな恐れを見事に代弁

していて、ここでも私は笑わされてしまいました。物書きは言葉遊びをしながら事の本質をさりげなく語るものですが、この作品には、そうした趣があるのです。

「人形」というお作も印象的な作品です。この作品は、須藤さんが小学校の先生をなさっていた頃の、四年生の女生徒の詩を回想して書いておられるものですが、この子は、父親に怒られて人形になりたかった、と書いているだけで、具体的な人形の姿は不明なのに、そのときの〈人形〉という言葉の切実さが、須藤さんの胸を打ったのです。父親に怒られた女の子が咄嗟に思ったこと——人形ならば怒られはすまい。その人形の中に逃げこみたい。——そういう思いが百パーセント、須藤さんに届いているところが、すてきです。どういう姿をした人形か、ではなく、人間の身代りになる人形が、ここでは主役になっていて、それが読み手に間然するところなく伝わってきます。作者の確かな感受性を語ってもある一篇でしょう。

「返事」——これも好きな作品です。添い寝をしてもらいたくて寝室からお勝手の母親を呼ぶ子供に、忙しくてそれどころでない母親が〈床に落とすような生返事〉をする。うまい表現です。そしてこの生返事も子供が育つ過程での〈肥やし〉だろうと思っている父親の眩きが、一見、傍観者ふうですが温かいのです。

「天桃の困窮」——これもすばらしい作品です。どの連も好きですが、とりわけ、手鏡

を持ち出して太陽の光を反射させたところ、〈あまりにも微量すぎる〉という太陽の感想の返ってくる第二連が楽しい。

「も」——ある人の死亡を伝えた新聞記事の中に〈三十七歳も年下の優子夫人と再婚し——〉と書いてあったのを見て〈も〉を余計な批評を感じ、人の死に批評記事は不要と須藤さんは考える。たとえ一字でも出すぎた批評に立腹する、この怒りっぱさに共鳴します。

「あると感じたとき」——これも流石と思わせる作品です。

「わが愛するもの」——〈自分に塩をまいて／なめくじのように消え入りそうな小さな純朴を愛す。〉に共感。

他にも触れたいお作が沢山あるのですが、こんなふうに書き連ねているとキリがありませんので、このあたりで止めましょう。

御詩集の味のある題名にも敬意を表しつつ、すてきな御詩集の刊行をお祝い申し上げます。

第
1
葉

走
っ
た
走
っ
た

走った走った

走った走った

先生が走った

ボンネット・バスと

先生が走った

昭和三十年の夏

白い短パン

白いランニング・シャツ

白い運動靴

白い靴下

いまだ

ぼくらが触れたことのない

白 白 白 白

あらわになった白い太ももが